

### 人類の遺産に目をそそぐー北海道から高校生

十一月二十三日、北海道から修学旅行で高校生六〇名が見学に訪れました。北海道からの来館は年に二、三校、久しぶりの遠来の学校です。大雪山国立公園をのぞむ帯広市近く上川郡新徳高校の二年生で、奈良・京都を巡っての帰路の見学。修学旅行研修班が制作した「研修のしおり」には法隆寺・薬師寺・東大寺の仏閣仏像、京都一日自由見学の見所と共に第五福竜丸が写真と乗組員の証言、当時の新聞報道などでびっしり紹介、学習への意欲にあふれていました。新幹線で京都から直行した一行



今年も子どもたちで満ちあふれて



は正午前展示館に到着。「すごい迫力」「大仏よりでかいかな」など口々にしつつ見学。「薬師寺の月光菩薩はじめ日本の文化遺産の精髓の一つ一つを目の前にしてきた。いま相対した木造の船も世界にただ一つしかない人類の遺産、人類の命運を示すその船に触れる」などの解説を手に、クラス毎に折ったという青色の千羽鶴を贈りました。学習のあとは、葛西の臨海水族館でまぐろの群遊を見、東京ディズニーランドへ。翌日は三時まで原宿の「自由研修」をして、羽田から帰郷というスケジュール。

「自主・自立・完全燃焼」がモットーの学校らしい修学旅行でした。子どもたちの見学のあとに十一月下旬から十二月上旬は小学校の社会科見学が相次ぎます。毎年その学校の数が多くなるのはうれしいことですが、今年は十一月二十六日に三三三校、二十七日三六校、十二月一日二三三校、二日二十校と連日船を見つめる子どもたちで満ち溢れました。PTAの見学も多く、千葉県市川市の平田小学校六年生は「船を見、話を聞いて感動、翌日鶴を折りました」と子どもたちのおみやげを持参してお母さんの見学会も持たれました。

十一月の来館者は六万七千三百名余、一カ月の最高です。マジュロから政府の職員来館十一月十五日、マーシャル諸島共和国からワセ・シゲル氏がカメラマンの島田興生夫妻の案内で来館。シゲル氏は中央政府維持機構の一員で、港湾施設の管理にあたる

地球化学研究協会創立二十周年の記念公開講座がそれで、「ダイヤモンドと地球史」と題する小島稔大阪大学教授の講演につづき、「科学者三宅先生を語る」として、向坊隆、川崎昭一郎、服部学、岩

垂弘、猿橋勝子の各氏がそれぞれ三宅先生の人と思想を語りました。ひき続いて、三宅賞の受賞式、記念講演、懇親会も行なわれ、川崎会長はじめ平和協会の関係者も多数出席し懇談しました。

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

### 言い聞かせていること

広島・長崎への原爆投下以後、人間の頭上に原爆を落とすことだけは、国際世論の力でからも阻まれてきたと思うが、にもかかわらず、戦後一〇年足らずの一九五四年三月、第五福竜丸が、合衆国政府によるビキニの水爆実験で被爆した。そのことがどんなふう

### 祖父江 昭二

きに近い情感が起ってくる。しかし、こんなことでのいかとといった危機意識で、あの悲劇的事件とその後の事態を受けとめていた人びとが多かったであろう、このあと原水爆反対の署名運動などが広がっていった。ただ、ひらの国民の一人としてかえりみると、平和と民主主義を希求する日本国憲法が成立した戦後の日本でも、「平和」の旗をかけることはたやすくはなかったと思う。第五福竜丸の被爆の数年前の一九五〇年三月、「原子兵器の無条件禁止」等を訴えたストックホルム・アピールが発表された。この人類にとって当然のような訴えに及び、日本でもその署名運動が始められたはずだが、追い打ちをかけるように朝鮮戦争が起り、日本は国連軍という名のアメリカ軍の軍事基地の役割を果たしていたためか、自分は「共産主義者」ではないが……といった、およそ「言論・思想の自由」といった原則からするとまったく必要のない弁明的な前口上を言わないと、平和への希求を述べることがむづかしいといった雰囲気であった。それから四〇年。「自衛隊」という

軍隊が外国に派兵されるという事態が起きるまでに至った。「派兵」ではなく「派遣」という、いかにも日本風の言い換えが支配的だが、そう言えば、かつて中国で戦争をしている日本陸軍は、むしろ「支那侵略軍」などとは名を呼ばない。「支那派遣軍」と名づけられていた。「大東亜戦争」を始めるまでは、「満洲事変」「支那事変」などと呼ばれ、「戦争」とは規定されず、しかもそのいくさは「東洋平和のため」と理由づけられ、そういうことばが使われている「露宮の歌」などをよく歌った。あれから半世紀。またぞろ「派兵」ではなく、「派遣」だ、国際平和・国際貢献のためだ……といった言辭が横行するいま、だからいっそう「平和」ということがきびしく問われているのだなと感じる。いまや「平和」ではなく、「戦争」だといったような率直な言辭は、さすがにまだ聞かえてはこない(戦中には、たしか「戦争は創造の母」といった論理「？」を説くイデオログもいた)。口ごもることなく「平和」を主張できるいまを大事にし、しかし「派兵」という事態を見つめ、絶望しないで「平和」への道を……と自分に言い聞かせている。(和光大学教授)

本土復帰二十年の沖縄 ⑥

### 自らの過去を問い直す

岩 垂 弘

沖縄の人々らが参加する「台湾の沖縄史跡を訪ねる旅」の一行十七人は、昨年七月五日、沖縄の那覇空港から台湾に向けて飛び立った。台湾に今なお残る沖縄関係の史跡をこの目で見て、沖縄と台湾の歴史的な関係に理解を深めようというわけである。別な言い方をすれば、沖縄県人として自らの過去を問い直す旅であった。沖縄出身者でない私もまた、この旅に加わった。

ガイド役はこの旅を構想した又吉盛清さん（沖縄県浦添市美術館主査・沖縄近代史研究者）である。

旅は四泊五日。車と航空機を利用して台北―台南―車城―台湾最南端の岬の鵝鑾鼻―高雄―澎湖島―台北と回った。台湾全体から見ればごく限られた地域だが、私たちが回った行き先々に、戦前の日本や沖縄とのかかわりを示す建造物やその跡があった。なによりも、

その多さに驚いた。そのことは、台湾が実に五十年もの長きにわたって日本の植民地支配のもとにあったという事実をいやおうなく私たちに突き付けた。そしてまた、沖縄とのかかわりを示すもののこの多さは、戦前の沖縄と台湾の関係の濃密さをしのばせるに十分だった。

それにしても、私にとって一番印象的だったのは、台湾南端に近い車城に立つ「琉球藩民五十四名墓」だった。それは、台湾南部の田園の一角、パシ―海峡を望む小高い丘に立っていた。これは、「台湾遭害事件」と呼ばれる事件にからむ墓である。

これは、一八七一年（明治四年）、台湾東部海岸に台風で漂着した琉球（沖縄）・宮古の貢納船乗組員六十九人のうち水死を免れた六十六人が山の中に迷い込み、五十四人がパイワン族に首をはねられた事件。十二人は漢民族に助けられ、

郷里に帰ることができた。

当時、琉球は日本に帰属するのかが、清国に帰属するのかが問題になっていた。明治政府は「琉球人民の殺害されしを報復すべきは日本帝国の義務」として、一八七四年（明治七年）、台湾出兵に踏み切った。琉球の日本帰属を清国に認めさせる好機と考えたわけである。西郷従道が指揮する日本軍三千六百人は車城に上陸、パイワン族の居住地に総攻撃をかけた。そして、パイワン族に殺された五十四人の墓を建立した。墓石には「大日本琉球藩民五十四名墓」と刻んだ。

これこそ、近代日本による初めての海外出兵だった。その五年後、琉球が日本の一つの県とされ（いわゆる琉球処分）、一八九五年（明治二十八年）には台湾も日本の領有するところとなっていたことを考えると、この墓は近代日本が海外に進出していく起点ともなった記念碑とも言える、と又吉さんは見る。

ついでに言えば、一九七八年になって、この墓が又吉さんによって発見された。墓石は雑草に覆われ、荒れ果てていた。又吉さんら

沖縄の人々は、地元の協力を得て改修・復元した。一九八二年のことだ。復元にあたっては、地元の人々の意向を容れて、墓石の「大日本」の三文字にセメントを流し込み、判読できないようにした。台南の近くでは、「億載金城」を見た。西郷軍の台湾上陸に衝撃を受けた清国が台湾の海岸防備のために造った要塞である。巨大な城趾に残る砲台をこの目で見た時、当時の清国の衝撃の深さがしのばれた。

澎湖島では、日清戦争の際、日本軍が上陸した港や、日本側の戦病死した兵士が埋葬された跡などを見た。日本軍三千人の中に兵士や従軍記者ら三人の沖縄出身者がいたことを知った。台北では、沖縄出身の売春婦もいたとされる遊郭跡も見た。

ツアー参加者の一人は「沖縄と台湾との歴史的な関係がよく分かった」と語った。今年六月には、又吉さんら沖縄の人々に本土の人々を加えた一行による同様のツアーが行われた。自らの過去を問い直す旅は新たな発展を見せ始めたと言えそうだ。（ジャーナリスト）

〓おわり

### 第六回国際非核自治体会議に参加して

斎藤 鶴子

一九九二年十一月五日〜七日まで、横浜国際平和会議場で開催された第六回国際非核自治体会議に、私は私の住む中野区およびかけこたえ、よろこんでオブザーバーとして参加した。

第一分科会で、坂本義和さんや最上敏樹さんなどの発言は、国連のあり方を問われたもので、お話の中から国連の「活性化」は単に強力な国連をつくるというのではなく、公平な第三者的機関として行動する国連の強化であり、原点は人権であり、国家や民族の間の紛争の根底にある動きを知り、国連は民衆の平和的生存権、人権保障のため何ができるかであるというところを強く感じた。

第二分科会では、議長の武者小路公秀さんがタヒチの市長さんが出席できなかったので発言を代読された。ムルロア、ポリネシアなどのフランスの核実験の被害に対しての長年の抵抗運動には頭が下

がり感動した。朝日新聞の論説副主幹中馬清福さんは、戦術核は削減されているが、アメリカの戦略核の70%は海にうつり「海上戦略核」はさらに増強されている。「点検」と「進歩」を目標とする核実験を停止しない限り核廃絶はおぼつかない。アジア・太平洋では核廃絶のため何をなすべきかについて段階を追って話された。

第一日目の国際非核自治体会議NGO主催の「プルトニウム輸送を考える」分科会で高木仁三郎さんは基調報告で、プルトニウム輸送に反対する理由として、輸送の安全性が確保されていないこと、仮に増殖炉「もんじゅ」の必要量を認めたとしても動燃は余剰のプルトニウムをもっていて輸入の必要はない。このまま契約に従って、フランス、イギリスで再処理が行われ、プルトニウムが返還されれば日本のプルトニウムの余剰は年々

増加する。

また、竹村秀明さんは、プルトニウムの管理のずさんさ、計算値と実測値の誤差の大きいこと、結果、プルトニウム一〇二キログラムが消費している、と話された。

日頃から、科学の進歩と日本の原子力産業の内情の複雑さを思う私は、半減期二万四千年、耳かき一杯の粉末でおよそ一〇〇万人を肺ガンや白血病にするといわれるこのプルトニウムの危険を人びとに知らせてゆかねばと思う。

最後の全体会では、各分科会からの報告がなされた。日本の主催者側の意図はともあれ、国の内外を問わずプルトニウム輸送反対の声が上がった。日本自治体への「特別アピール」は、プルトニウム輸送の日本の計画に反対し、フランス、イギリス、日本に対し輸送の中止を要求するものであり、日本の自治体へその検討を強く要求するものであった。

アジア・太平洋の非核化について、ニュージーランドの元ロンギ首相はニュージーランドの非核化政策について話され、フィリピンの代表は一九九二年十一月二十四日までに米軍基地を撤去すると話され

た。

日本では現在、過半数である千七百の自治体が非核宣言をしているとき。これをさらにふやし、国連や国家にまかせきれない核廃絶を地方自治体と住民が力を合わせて進めることが非核自治体運動で、いま具体的には核搭載あいまいな戦艦の横須賀入港を拒否すること（一九九二年七月二日、ブッシュ大統領は、アメリカの戦艦及び攻撃用潜水艦からすべての戦術核兵器を撤去することを発表している）や、プルトニウム輸送をやめさせることなどが「核廃絶」への一里塚だと私は思う。

いま、核廃絶、非核を核兵器に限定することなく原子力に広めてゆかねば「核廃絶」の真価は発揮できないのではなからうか。

ロンギ元首相は「この非核化政策はニュージーランドの水域への原子力船の入港を禁止しており、核兵器を搭載してはいけないことを納得しない限り、この艦船及び航空機を締め出す。これを守るのには国民及び世論の力である」と述べられた。主催者は国民であること深く心にとめた一言であった。（中野区民・草の実会会員）